2015

発行日　平成27年7月6日
発行者
富山・ミラノデザイン交流倶楽部
高岡市オフィスパーク 5
公益社団法人富山県デザイン協会内
TEL.0766-63-7140

執筆　池田美雪 ＊ミラノ在住

ミラノ・サローネ国際家具見本市

「景気回復への一歩を踏み出したミラノ・サローネ」

4月14日から19日までの6日間、ミラノ・ロー国際見本市会場にて、第54回ミラノ・サローネ国際見本市（以下、ミラノ・サローネ）が開催された。

ミラノ・ロー国際見本市会場敷地内(全見本市会場面積34万平米、全見本市出展面積約20万平米)では、第54回Salone Internazionale del Mobile、第29回Salone Internazionale del Complemento d'Arredo、第18回 SaloneSatellite、そして隔年開催される見本市として、第28回Euroluce、第17回Workplace3.0/Salone Ufficio、が開催された。

同じ隔年開催展示が行われた2年前の参加総数2015社と比べほぼ横ばいの、出展社総数2010社（出展社数内訳：Salone Internazionale del Mobile 1450社、Euroluce 450社、Salone Ufficio 110社、SaloneSatellite デザイナー700名−18校+ADI）が集い、今後のインテリア・デザインの多角的な方向性を示した。

又、参加国数は160ヶ国、来場者総数は34万1721人（内31万840人が業界関係者）に達し、2013年に比べ業界関係者の来場者数は2万5145人の増加となっている。その内の69%は国外からの来場者であるが、その数はもちろんのこと、購買力の高さも出展者から評価される結果となった。懸念されていたロシアからも多くが来場し、来場者数一位は中国、そして二位にドイツが飛躍的な数を記録し、更には、中東からサウジアラビア、レバノン、エジプト、そしてアメリカや英国、インドからの来場者数にも増加が見られた。

この事実を前に、「イタリアをはじめとする世界トップブランドが集結するイベントが、どれほど魅力的で重要視されているかを再認識できる結果が出せた。」とRoberto Snaidero社長は喜びを表明した。更に、「出展者は来場者の質の高さに満足を示した。ここ数年の厳しい状況を乗り越え、この6日間の見本市を通して好業績を収めることができ、サローネが景気回復の第一歩を踏み出す場となった。」と付け加えた。

開幕初日に会場を訪れたRenzi首相も、出展者を対象にした演説の場で景気回復について触れ、家具分野において国内市場の発展と国外輸出プロモーション活動に対する支援を約束した。また、今年は政界から多くの大臣や関係者も会場を訪れ、業界が非常に高く評価され、国にとって重要なイベントであることを証明することとなった。

開催に先駆け、2月10日、旧ミラノ見本市会場跡地の再開発の1つとして年内完成予定の、磯崎新設計の50階建て超高層タワー「Allianz Tower」の35階にて

撮影• Alessandro Russotti

初日４月14日のエントランスの様子。例年にも増して、来場者の波は地下鉄の出口から押し寄せていた。

撮影• Alessandro Russotti

今年の見所、Workplace3.0（SaloneUfficio）へ誘うサインボード。

撮影• Alessandro Russotti

見本市の出展者に向けて、熱く演説を行なうRenzi首相。

旧ミラノ見本市会場跡地に建設中の、磯崎新設計Allianz Tower。

記者発表会が開催された。国営放送Raiのニュース番組「ニュース24」のアナウンサーによる司会と共に幕を開けた。Allianz　Towerがそびえ立つ見本市会場跡地の再開発を手がけるMyLife社CEOの挨拶から始まり、続いてFLA　Eventi社（ミラノ・サローネ運営会社）のRoberto　Snaidero社長の挨拶、今年の3大インスタレーション（オフィス部門の「The　Walk」、照明部門の「Favilla」、新アプリ「IN　ITALY」）の紹介と、ミラノ・サローネ開催翌日から始まるレオナルド・ダ・ヴィンチ没後500年記念展の紹介が行なわれた。更に「The　Walk」を手がけたデザイナーMichele　De　Lucchiの挨拶、締めくくりはミラノ市長Pisapiaから「年内ミラノの街を90,000個のLEDで埋め尽くす」という、ユネスコが推進する「国際光年」と「Luce = 光」にふさわしいニュースに会場が沸いた。

今年のミラノ・サローネへは、5月1日から開催されているミラノ国際博覧会直前の国際イベントとして、世界各国から博覧会への期待を持って訪れた人も多く、ミラノ市街も含め、弾けんばかりの活気に満ちた6日間であった。また、展示者側もエキスポを意識した「食」に関するデザインに焦点を当てるなどし、来場者の期待に添ったものとなった。

今年は、ミラノが世界中から注目を浴びる年。ミラノ・サローネもその重要性が再確認されるかのように、天候にも恵まれ、初日のRenzi首相の演説を皮切りに幸先の良いスタートを切った。

「THE WALK」- LA PASSEGGIATA

ワーク・スペースの新しい提案をテーマに、パビリオン22/24号館内のWorkplace3.0内で、デザイナーMichele　De　Lucchiによるインスタレーション「THE WALK」が開催された。展示ブースに囲まれながらもとても開けたスペースに、ゆるやかな8の字を上下に描くスロープを設置することで、その全体像が見渡すこともできる動きのある空間が作られた。

「ワークスペースとは、スポーツジムに例えて言うなら『脳を鍛える場』であり、人と人との関係が新しい可能性を生む場である。また、未来型オフィスでは形式にとらわれないライフスタイルがビジュアル化されるべきであり、常に新しいアイデアが溢れ出る空間でなければならない。」とのコンセプトを基盤とする。インスタレーションのタイトル「THE　WALK」は、「立ち止まることのない」現代社会のメタファーであり、歩き続けることの大切さがこのプロジェクトに秘められたテーマである。

現代では、オフィス内の仕事場よりも、受付や会議室など外部との接点の場に重きが置かれ、人々の創造の場における快適さが忘れられている。このインスタレーションでは、「クラブ」「フリー・マン」「アゴラ」「ラボラトリー」の4つのテーマに添った、新しいワーク・スペースの提案がなされた。

「クラブ」は、新しい概念によるフリーなオープン・オフィスとして、人と人が出会い、自由に快適にコミュニケーションできる場。この空間にはデスクはなく、そこに留まる義務もなく、昼夜を通してより良い仕事ができるように工夫されている。

「フリー・マン」では、個人の創造力を養いつつ、グループ・ワークのポテンシャルを高める場として機能する。また、他との適度な距離を保ちながら、誰にも邪魔されずに商談ができる場でもある。

「アゴラ」は、コミュニケーション意識をより高める場として、カンファレンス、プレ

撮影• Saverio Lombardi Vallauri

記者発表会で、「レオナルド1452-1519 世界のデザイン展」を紹介するPisapia市長。

撮影• Andrea Mariani

外部会場イベント「Favilla」のオープニングセレモニーは、建築家Attilio　Stocchi（左から４人目）を囲んでSan Fedele広場で行なわれた。

copyright• aMDL Studio

インスタレーション「The　Walk」のレンダリングとイメージスケッチ。４つのワークスペースが、スロープで緩やかに結ばれている。

撮影• Saverio Lombardi Vallauri

ワークスペース「クラブ」は、くつろいだ環境の中で、他と刺激し合える場所。

撮影• Carola Merello

ワークスペース「フリー・マン」からインスタレーションを見た様子。

ゼンテーション、展示などの用途にあわせて使える機能を持つ。
「ラボラトリー」は、手作業やデジタルツールなど様々な方法で、書類やプレゼン資料、3Dプロトタイプ、画像・映像などの作業を行なえる場であり、この作業を通じてコミュニティを生み、信頼関係を築くことを目的とする。
これらの新しいスペース提案は、緑豊かなガーデンに囲まれ、花の香りを楽しみながら季節の移り変わりを肌で感じ、自然の美しさ、引いては我々も自然の一部であることへの再認識を促している。既存のオフィス空間では、特定の規則が空間を縛ることにより創造力が育つ土壌を失っている。敢えてそれらの既成概念を排除すると同時に、環境へアートを導入することで仕事環境を肥沃な場に転換し、また、人々の感覚と想像力を研ぎすませ、インフォーマルな環境を作り出すことで、より良い人間関係を築くことができる環境へと発展させることができるであろう。

撮影• Carola Merello
ワークスペース「アゴラ」では、自由な空気の中でプレゼンテーションやカンファレンスを行なうことができる。

撮影• Carola Merello
ワークスペース「ラボラトリー」で様々な手法でプレゼンテーションを制作する様子。

「IN ITALY」

マルチメディアによるインスタレーション「IN ITALY」は、イタリア家具連盟が主催し、全国からイタリア企業64社が「イタリア製を作るということを知る」をテーマに、映像を使って自ら語ることができる、又とない機会となった。企業のアピールという側面以上に、イタリア製品がなぜ、これほどまでに世界的な支持を得ているのか、その秘密を探る面白さを持ち合わせたインスタレーションであった。
イタリア製品の素晴らしさは、千年以上に渡って培われてきた芸術的な伝統から生まれ、美しさと、デザイナーへ二つとない製品を創り出すことを許す工業的ノウハウに組み合わされた職人の伝統技能に支えられている。
イタリアン・ライフスタイルは、5人のデザイナーにより、5つのシチュエーション、5つのスタイル、イタリア半島を代表する5つの土地（ローマ・ミラノ・レッチェ・ヴェネチア・シエナ丘陵地帯）をテーマに制作された。
来場者は、スクリーンに映し出された120本のビデオを見ながら、家具や企業の歴史、職人の技量、さまざまなエピソードとイタリアの各々の土地に根ざした文化を楽しんだ。
このインスタレーションは、スマートフォンのアプリからも閲覧ができ、また、今後世界の主要都市で巡回展として公開される予定である。

撮影• Alessandro Russotti
ビデオ・インスタレーション「IN ITALY」の会場の様子。複数の大きなスクリーンから、Made in Italyにまつわる、様々なエピソードが語られる。

「FAVILLA」 - 一つの光、一つの声

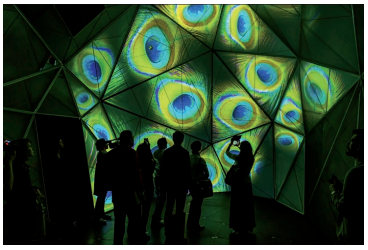
EuroLuceの併催イベントとして、ミラノ中心地にあるSan Fedele広場にて開催された光と音のインスタレーション「FAVILLA」。ここ数年、ロー見本市会場外におけるコズミット主催のイベントが行なわれていなかったためか、入場口には来場者の長い列ができ、会期中1万人以上の来場者を迎える結果となり、このイベント再開は大きな反響を呼んだ。建築家Attilio Stocchiによるこのプロジェクトは、同じくこの建築家により同じ広場で実現された2011年のインスタレーションCuore Boscoの続編である。光をテーマにしたインスタレーションは、単にミラノ・サローネへのオマージュではなく、ユネスコが提案する国際光の年へのオマージュでもある。
「FAVILLA」は、光への探求が語りとなり、光の本質に迫る3次元の描写である。何が自然な光の本質なのか、どのように空間を移動し、どのように我々のもとに届くのか、何世紀にも渡り科学者が解明できなかった、この掴みどころのな

copyright• Attilio Stocchi
「FAVILLA」のインスタレーション・イメージ画像。

撮影• Alessandro Russotti
SanFedele広場に設置されたインスタレーション「FAVILLA」の会場の様子。

い光の正体を皆なでもう一度探ってみよう、という主旨である。18世紀、光（照明）が人々の生活を大きく変えたことは誰もが知っていることだが、光とは何か、自然と私たちの生命の源である光を哲学的に解明しよう、という試みでもある。「FAVILLA」とは「閃光」を意味する。光が明かりを灯す以上に持つ神秘性を探る15分間。

自動車会社フォードの協賛により広場に設置された大きな箱ブラックボックスの中では、古代ギリシャ悲劇をモデルとした4つのエピソード−4つの合唱−エピローグから構成されたストーリーが展開された。暗い3次元空間に身を投じると、ボックスの奥に設置されたスクリーンに様々な色を伴った光が投影され、それと対となり音が発せられた。メインとなる4つのエピソードは、1704年出版のニュートンの主著のひとつである「光学」に記載されている、光の粒子論「粒子と波動の二重性」に基づき、4つの光「直線」「回折」「反射」「屈折」による光の伝播が可視化されたもの。その他、「太陽光」「クロロフィルによる光合成」「虹」といったテーマに基づき、音と共に意表を突く、きらびやかな光のショーが繰り広げられた。



撮影• Alessandro Russotti

「Leonardo - 1452-1519 世界のデザイン展」

レオナルド・ダ・ヴィンチの誕生日4月15日を祝い、ミラノ王宮内の美術館にて「Leonardo - 1452-1519 世界のデザイン展」が幕を開けた。ミラノ・サローネが協賛するイベントであるが、イタリア国内でこれまでにこれほどの大きな規模で、画家・彫刻家・エンジニア・解剖学者・音楽家・発明家として、芸術と科学の両面で無数の作品を残したレオナルド・ダ・ヴィンチの全貌を紹介するのは初めてである。この展覧会は、ミラノ市とイタリアの美術出版社Skiraの長年のパートナーシップにより実現した。キュレーターには「最後の晩餐」の壁画修復を主導したことで知られる、ダ・ヴィンチ研究家のPietro Maraniと美術史家Maria Teresa Fiorioの2人が抜擢された。また、顧問としてメトロポリタン美術館主任学芸員、フィレンツェ美術館特別監督局長官、アンブロジアーナ図書館館長、ロンドン・ナショナルギャラリー・キュレーター、バチカン美術館館長、ウフィツィ素描版画館館長、ルーブル美術館絵画部長らが展覧会実現に寄与した。

会場はテーマごとに12のセクションに分けられ、最後の晩餐の修復に関する資料など、総数200点以上の作品が展示されている。展覧会は7月19日まで行なわれている。

撮影• Saverio Lombardi Vallauri

「レオナルド1452-1519 世界のデザイン展」が開催されている、ミラノ王宮のエントランス。

撮影• Andrea Mariani

展覧会オープニングを楽しむPisapia市長（右から2人目）。

展示品の一部は、こちらのサイトで紹介されています。どうぞご覧下さい。

http://www.skiragrandimostre.it/leonardo/galleria-opere-mostra-leonardo.html

サローネ・サテリテ　-　ライフ・プラネット

今年で18年目を迎えるサテリテは、エキスポに因み「ライフ・プラネット」をテーマとし、サテリテ出身の３人のデザイナーとデザイン学校１校により、サテリテ空間内に4つのインスタレーションを展開した。

ブース内に展示された35歳以下の若いデザイナーによる各作品は、例年以上に完成度の高い作品ばかりであったが、それらの中でも、コンセプトとその表現スタイルの新しさで特に注目を集めていた作品がいくつかある。

ミラノ・エキスポとのコラボレーションを強調するエントランスのパネル。

まず、サテリテ・パビリオンに入り、すぐに目を奪われたのが、サテリテアワード1位を獲得したXuberance Studioのブースに展示された、華やかな作品の数々。すべて3Dプリントで制作した作品、白いウエディングドレスやそれにあわせるヘアアクセサリー、インテリア小物など、照明を暗くした黒いブースに怪しげに浮かび上がる白い作品の展示は、非常にインパクトがあった。

インドのムンバイ市の女性コミュニティを支援するプロジェクト「Tiny Miracles のためのPepe Heykoop」は、オランダ人デザイナーPepe HeykoopがTiny Miracles財団と共に貧困層の女性たちを対象にワークショップを開き、彼女らの手作業を活用することで製品を作り出している。2010年にスタートしたこのプロジェクトには現在100名の女性が参加しており、教育・仕事・ヘルスケア・娯楽活動などのサポートを行なうことで、彼女たちが経済的に自立し、ネガティブな鎖から開放されることを目指している。目標は、2020年の参加者700名。サテリテに展示された製品は、一見するとスマートで繊細な紙を使ったデザインだが、その背景で、このように多くの人たちが助け合っていることに感銘を受けた。

洗練されたフォルムと伝統技術が融合し、フレッシュなデザイン・コレクションを展示していたのは、中国出身のデザイナー・グループ「素生（Sozen）」。竹が持つしなやかさを自在に取り入れ、ランプシェードやチェア、スツールなど、手の温もりを伝えながらも、とても現代的なデザインを作り出している。ブース内には、職人が竹を編んでいる様子などの制作工程がビデオで紹介され、来場者は立ち止まって見入っていた。

ヴェローナのデザインスタジオDossofioritoが着生植物を室内で楽しむ為に発案デザインした瓶は、瓶の内部と外部を通過する小さな気孔をもつセラミックにより、内部の水が適度に外部に浸透し、植物が生育する仕組みになっている。口と底の部分に塗装が施され、セラミックの自然な肌合いと相まって、インテリアのアクセントとなる心地よいデザインになっている。

今年で第6回目を迎えるサテリテ・アワードへは、隔年開催見本市（照明とオフィス）をテーマに優秀作品が選ばれたが、その審査・選考へは見本市への出展企業だけでなく、建築事務所や美術館関係者らも携わった。

1位受賞作品は、前述の中国のデザイン・スタジオXuberance Studioによる照明器具シリーズ「Cloud Series Lamp」。ここ数年で世界中で急激に普及している3Dプリントにより実現されたランプシェードは、中国の伝統美が最新テクノロジーと融合し、さらに洗練されたことが高く評価された。

2位受賞作品は、台湾のアーティストScott Haung Kineticによる、「Dandelion Mirror」。顔の動きに反応するユニークな鏡。

3位受賞作品は、オーストラリアのデザイナーViktor Legin di Studio Copperによる「Balance Pendant」。モビールのように動くランプコレクションは、極めてシンプルな要素でデザインを表現したことが評価された。

また、特別賞として、ドイツのデザイナーDocumentary Designによるスピーカーシステム「Mapuguaquèn Speakers Series」、そして同じくドイツのデザイン・グループOut for Spaceによる洋服掛け「KC1_CLIP Coat rack」が受賞した。

Xuberance Studio制作のウエディングドレス。

インド・ムンバイの女性たちが、1つ1つ丹念に折ったプリーツを巧みに使って制作された紙製の花瓶。

しなやかな竹素材を活用し、伝統技術と現代感覚でデザインされた素生の作品。

着生植物を楽しむ為のインテリア・アクセサリー。

サテリテ会場の様子。

撮影• Andrea Mariani

サテリテ・アワード１位を獲得した「Cloud Series Lamp」。
リンク　www.xuberance.org

サテリテ・アワード2位を獲得した作品「Dandelion Mirror」。

撮影• Andrea Mariani

Snaidero社長よりサテリテ・アワード３位を授与されるオーストラリアのデザイナーViktor Legin di Studio Copper。

撮影• Andrea Mariani

特別賞に輝いた、スピーカーシステム「Mapuguaquèn Speakers Series」とデザイナー。

撮影• Andrea Mariani

もう１つの特別賞を受賞した、デザイングループOut for Spaceと作品の洋服掛け「KC1_CLIP Coat rack」。

5vie　–　ミラノ・パワーの源

ミラノの中心地、Duomo広場から10分くらい歩いた地区に、1838年に創設された「siam（芸術職人協会）」がある。この建物の近くには、現在でも建物の中庭に面したスペースなどの隠れた場所で、多様な職人工房が生きている。昨今の職人ブームに勇気づけられてか、ミラノの経済発展を支えてきたこれらの職人技術とデザイン文化に新たな価値を見出そうと、昨年、アソシエーション「5vie（5つの通り）」が設立された。今年で2回目となるフオーリ・サローネへの参加だが、職人工房の開放、通りに面したショップでのエキシビジョンに加え、多くの特別イベントが開催された。数々のイベントの中でも特に来場者の注目の的となったのが、今年102歳を迎える建築家Luigi Caccia Dominioのストューディオの見学である。20世紀の近代建築を数多く設計してきた建築家は現在も健在であり、彼の仕事場を見ることの幸運を得たいと、午後3時から7時までのわずかな開場時間に、Sant'Ambrogio広場に面した建物の前には多くの人が列を成した。

Ambrosiana図書館内では、ブランド製品をオンライン販売するYOOXがエキシビジョン「MADE　IN　MILANO」を開催。ハンドメイド・1点作品という付加価値のついた正真正銘ミラノ製の作品が展示された。

Piazza Affari（ミラノ証券取引所に面した広場）では、SELETTI社によるイベント「ミラノのスーベニール」が開催された。広場には、ゴーカートや屋台などが設置され、通りのショップのエキシビジョンに飽きた大人たちが夜中まで楽しめる遊園地を実現。Palazzo　Mezzanotte（ミラノ証券取引所）内では、「1880-1980年デザイン展」を開催。100年間に、世界各国のデザイナーにより生み出された歴史に残るデザインを一般公開した。

通りの一角、旧倉庫内を利用したSpazio　Sanremoでは、イギリス人彫刻家Max Lambが、エキシビジョン「Exercises in seating」を開催。様々なフォームとマテリアルの椅子が、広いスペースにまるで語り合うように円形に並べられた様子は、とても静かで詩的な空間を作り出していた。

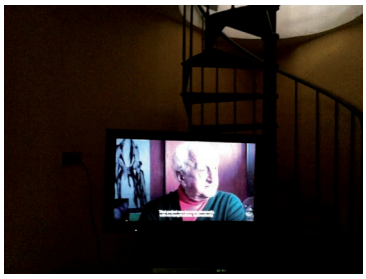
siamの内部では、現代の職人工房である3Dデジタル工房を一般公開し、来場者たちはこの新しい職人技術の可能性を感じ取る機会を得た。また、同じくsiamの内部では、デザイナーとアーティストを支援する文化協会MISIADによる大規模なエキシビジョン「DESIGN OFFSITE 2015」が開催された。歴史のある建物の内部に現代アートを展示することで、不思議なコントラストが生まれた空間であった。

Gnam Box Cafèでは、「料理は、お互いに知り合う機会と家でくつろぐ感覚を与える」とのコンセプトで、このインターナショナルでクリエイティブな世界へ来訪した見ず知らずの人たちが、一つのテーブルで食べ、語り、意見を交換し、休息する場が設けられた。

ミラノの中心地にありながらもゆったり静かに、歴史のある町並みに囲まれたスペースを楽しみながら、のんびりと選り抜きのハイ・クオリティなデザイン作品をこのように鑑賞するのは、まさに贅沢と言えよう。

Energy for Creativity　–　「A DREAM FOR TOMORROW」

デザイン雑誌INTERNI主催により、ミラノ国立大学の広い敷地内で例年開催されるこのイベントのインスタレーションの数々は、そのスケールも



建築家Luigi Caccia Dominioの展覧会で放映されたビデオ・インタビュー。

YOOXは、歴史あるアンブロジアーナ図書館内で、純ミラノ製のクオリティの高いデザイン工芸品を紹介。

がらんと広いスペースに置かれた、Max Lambの椅子の数々。

建物の中庭に出現したGnam Box Cafèへ、続々と入る来場者たち。

siamの内部で開催されたMISIAD主催「DESIGN OFFSITE 2015」の展示。

さることながら、参加デザイナーのクオリティの高さでも定評がある。「Energy for Creativity」は、様々なスケールのインスタレーションによりシナジーを生むことのできる表現方法を模索し、実験的に試みるチャンスとして提案するイベントである。イベントには、プロトタイプや建築模型、アウトドア&インドアのパビリオン、光のインスタレーション、ビデオ・インスタレーションと共に、エキシビジョン、パフォーマンス、カンファレンスも開催され、文化色の濃い内容となっている。昨年よりミラノ・エキスポに足並みを揃え、エキスポのテーマである「地球に食料を、生命にエネルギーを」に連動し、より良い地球の未来の為に「頭と心にエネルギーを」をスローガンに、今年は「A DREAM FOR TOMORROW」のテーマに添って18のインスタレーションが展示された。

「IRORI」、日本人建築家隈研吾とkitchenhouseによる共同制作のインスタレーション。パンフレットには、”人は「火」を囲んで暮らしてきた。「IRORI」は「火」とともに暮らす為の「自由なランドスケープ・キッチン」である。「IRORI」は、竹の板と鉄パイプで構成されている。火を中心に、テーブル・ベンチ・棚を好きなように足したり、引いたりできる。.....”と、書かれている。生きることの原点を見つめ直した、安堵感を感じるインスタレーションであった。

メインの中庭から階上へ向かう2つの階段の入り口には、ルネッサンス・グロテスク様式からインスピレーションを得て制作されたリチャード・ジノリのアートディレクションを務めるAlessandro Micheleのインスタレーション「Folklore」が既存のアーチ装飾と解け合った形で展示された。リチャード・ジノリ製のセラミックの皿、コーヒー・ポット、紅茶椀、蓋などで構成されたアーチは、軽快かつ幻想的で、まるで不思議の国に迷い込んだような気分にさせる一角であった。

Cortile della Farmaciaでは、建築家Daniel Libeskind&Libeskind Designと塗料会社OIKOSのコラボレーションによる巨大なインスタレーションが展示された。この真っ赤なインスタレーションは、Libeskindがスペース・オーガナイゼーションの原型として追求し続けているChamberworkshのシリーズNo.2から派生した作品。単純な平面の連続に見える複数の板の構成は、見る角度により姿を変える。

メインの中庭に人気を集めている一角を発見した。おしゃれな三輪車でドリンクをサービスしている。デザイナーPhilippe Starkが、「皆でこの瞬間を共有しよう！」と発案したパフォーマンス「We love We care」。ストロベリー色をした自然素材を使ったノンアルコールのこのドリンクのレシピもPhilippe Starkの考案。このパフォーマンスには「デザインの本質に戻ろう！サービスを提供し、解決策を見つけ、日常をより簡単で美しくする為の提案を行なうのがデザイナーの義務なのだから。」というメッセージが込められている。

同じく、メインの中庭では、目を背けたくなるほどの巨大なキッチュなインスタレーションが2つ君臨していた。1つは、デザイナーAlessandro&Francesco Mendiniデザインの「Monumento a IL ROSSETTO」。ポシティブなエネルギーについて、唇−美−赤−エネルギー−芸術という順で連想が展開するそうである。その結果、女性の口紅は芸術と深く結びついているという。そしてこの口紅で、毎日女性は自分の自画像を描く画家であるらしい。直径1.2mの口紅の容器は上部が回転し、その表面には妖精からインスピレーションを得たグラフィックが施されている。もう1つのインスタレーションは、国際的に活躍するイタリア人建築家Luca Trazziデザインの「Yellow Tower」。フランスを代表するシャンパン・メーカ

隈研吾とkitchenhouseの共同プロジェクト「IRORI」。

リチャード・ジノリのセラミックで装飾されたアーチ。

Daniel Libeskindによる真っ赤なインスタレーション。

Philippe Starkデザインのドリンクと、それを供給する三輪車「TOG CARES」。

Alessandro&Francesco Mendiniデザインの巨大なリップスティック。

ーVeuve　Clicquotの典型的なシャンパン・ボトルのシルエットをかたどったパビリオンである。陽が落ちると、内部に設置された白いテントがカウンターから発せられる照明光により照らし出され、ほのかな明かりを伴い人々の集う場所になる。

Energy for Creativityは、創造性とアイデアを支援する国際財団Be Openのプロジェクト「The Garden of Wonders, A Journey Through Scents」をブレラ美術学校内にある植物園の敷地内で開催した。Ferruccio Lavianiがデザインした10個の金色の箱形パビリオンが設けられ、そこでは過去を語り、そしてハイクオリティなハンドメイド・デザインの未来が考案された。ミラノ国立大学でのインスタレーションとは対照的に、ガラスのショーケースに入った作品は、小さな窓からのぞき見るほどの小さく繊細な作品ばかりであった。

Luca Torazziデザインのシャンパン・ボトルをかたどったインスタレーション。

今年のミラノ・サローネが例年以上に大成功に終わったこと、どのエキシビジョンもエキサイティングで来場者の期待を裏切らなかったこと、家具・デザイン業界の景気が回復に向かっていること、開催期間中、天候が良かったこと、すべてが素晴らしい6日間であった。

エキスポ開催の恩恵により、ここ数年で街が整備され、長年放置されていた空き地も活用されたことで、ミラノ市内の様相はずいぶん改善された。多くのイタリア国民が抱いていたエキスポ開催への不安をよそに、してやったりのミラノ市長の快挙である。

この度ミラノを訪れた観光客も、ミラノがデザインの街という認識を確かなものにしたに違いない。来年の開催へ、更に多くの来訪者があることを願いたい。

「The Garden of Wonders, A Journey Through Scents」にて、黄金のパビリオンのショーケースの中で展示された作品の1つ。

執筆者　略歴

池田美雪　インテリアデザイナー

武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒
Istituto Europeo di Design 建築インテリア科卒
1994年よりミラノ在住
主に個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わる
設計外に携わったプロジェクトとして
”do it jubunde”展（無印良品、ニコレッタ・ブランヅィとのコラボレーション）を企画ならび実現
”Soundesign”展（Marangoniファッションスクール主催）にて弦楽器”Caravantar”を発表
写真雑誌“ZOOM”日本版のコーディネート、翻訳　など
“TuPlay”展にてグラス楽器”FASOLA”を発表
「Bicarbonato : mille usi per te e la tua casa」執筆　（FAG出版社より）
（イタリアの生活に密着した重曹の活用方法を書き綴った本）
“B.A.C.“展（City Art ギャラリー）にて、インスタレーション”Ma.Ma.Ma” を発表
“Made in Bovisa“（Bodio小学校の子供たちとのプロジェクト）を起案、コーディネイト

クリエイティブ・コンサルティング会社（デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン）の共同経営者として活動
デザイン・ アートに関するコーディネイト、翻訳および通訳
日本とイタリアの文化交流を推進するデザイン・プロジェクト”stu-art”コーディネイター
現在、ミラノ・エキスポ開催にあわせたエキシビジョン”stu-art exhibition”（イタリアを代表するデザイン・スクールの学生が制作した作品展覧会–イタリア文化会館大阪ならびグランフロント大阪にて）のコーディネイトに携わる